

安倍

私は終戦の時、朝鮮の全羅南道に両親と妹、祖父母と叔母と一緒に住んでいました。当時、祖父母は、大きな雑貨店を経営するなど、色々な事業を行っていました。

父が戦地から早くに帰って来たので、近くの朝鮮の方たちが用意してくれた船で引き揚げました。皆が荷物の用意をしていた時、私と妹は、お人形さんを抱えながら、「これだけで良い」と、はしゃいでいました。



その引揚船が途中で台風に遭い、下関に着く予定が大幅に遅れ、大変な思いをして下関から祖父の故郷である出雲大社にたどり着きました。

その翌年の春、黒く墨で塗られた国語の教科書を貰い、出雲大社の小学校に入学しましたが、1学期くらいで父の郷里の鹿児島県日置郡吹上町の父の親戚のところに移りました。そこで、地元の花田小学校に転入しました。



周りの子供たちが裸足で通学していた頃、私は自分の足が大きくなって履けなくなるまで、赤い革靴で通学しました。

4年生の時、鹿児島市易居町に引越し、名山小学校に転校、長田中、玉竜高校へと進みました。



大石

懐かしい拍子木だね！

みなさん！観てたんでしょう！

しばし思い出して今日の『終戦記念日』を過ごしましょう。









大石

なに!!安倍ちゃんは鑑真(遣唐船)を体験しましたか?  
確か吉松典子さんもお父様の故郷が吹上?永吉?金峰?  
典子さんもこの LINE に参加していたらよかったのに  
洋子さんのトークが読めませんね。



大畑

こんにちは😊

皆さんの懐かしいお話し楽しく拝見させてもらっています♪私は城山の防空壕から

市内が焼けるのを見ました。

天文館で旅館をしていましたが福岡の久留米で小学1年川内で2年、3年から易居町大龍小学校でした。

平岡敏子さんといつも過ごしていました。



永野

安倍さんあなたも外地からの引揚者ですか?

懐かしいおはなし!?

実は私もそうです



大石

平岡敏子さん、足が速くなかった。あの頃は顔可愛い😊も条件だったけど「足が速い」のも一目おかれまして。彼女の足は例えればカモシカのように。



大畑

そうですね カモシカのように 素敵な足🦶をされていましたよ。  
宿題 ゴム跳び いつも一緒でした♪



西山

私の家は易居町で衣料品店を営んでいました。高校卒業の頃まで鹿児島駅から小川町と易居町への商店街がメインストリートのようになっていました。

力道山やオルテガなどのプロレスラー一行は、その商店街通りでパレードしていました。女の子はゴム跳び。男の子は目玉かカツタですか。



永野

私は満州国で生まれ7歳まで満州にいました。

敗戦になり日本に引き揚げはいちばん最後。

一年生の夏に鹿児島に帰ってきました。

2年の時、森尾先生でした。クラスの中で5人の中に入り成績優秀賞も貰いましたー👏  
ビックリ嬉しいでしたその時の賞状は今も持っています♪ 初めての賞でした。



西山

永野さん、今と同じように大変優秀だったのですね！

その調子で病氣も克服してください。

日本の国土の2倍の面積があった満州生まれの人は多いと思います。



永野

私はゴム跳びは6年5組で一番飛べる人になりました。

学校代表になつたこともあります。



安倍

よく、ゴム段飛びしました。

加来いつ子さん、西原尋子さん、武田むつ子さんたちとも、家が近くて、良く遊びました。





森

そのころは学校対抗ゴム跳び大会があったのですね。  
知らなかった




大畑

大龍では3年と5年が谷川先生 4年と6年が山下先生でした。山下先生には絵を褒めてくださり、今まで楽しく描かせて貰っています。

同級生に上山憲一郎さん 森繁さんがいました。

森さんは福助足袋の商標の様な丸い顔が印象的でした。

ごめんなさい  色白で 丸い顔でしたので(顔文字)



永野

森さん 私の言いたいこと!?

私がゴム飛びをよく飛びよつたの。

西田先生の目にとまたつたのそうしたら、棒高跳びの選手に選ばれたの。



木庭

多くの方が、引き揚げを経験されておられるのですね！

森さんの紙芝居の写真懐かしいですね。

黄金バット、ただ見はできなかったことも覚えています。

懐かしい話が聞け、よかったです。



西山

山下岩助先生には大龍3年1組の時、顔に手形が残るほどいつも殴られていました。殴られる理由は全く判りませんでした。

軍隊帰りの先生はよく殴っていたそうです。

あの先生の奥さんは優しい人ではありませんでした。

家は高麗町甲南高校のそばでした。



森  
指宿の八期同窓会で寛子様に頂いた  
水墨画は今も部屋に飾っていますよ。



大畑  
水墨画ではなく 水彩画です  
飾って頂いてありがとうございます😊と  
ても嬉しいです(ありがとう)。



木庭  
紙芝居のお金、とても、母親には言えなかったことも覚えています。  
父を戦没者で亡くして、男兄弟3人、母も食べさすのに大変だったと思います。



森  
高麗町の山下先生宅に正月同級  
生と訪問したことがありました



西山  
実になごやかな良い風景の写真ですね。  
山下先生は大変な酒好きでした。



森  
お酒が出ているところをみると皆さん二十歳を過ぎてたのでしょうか



大石  
左は永野敦士くん？



大畑  
種子田磨子さんがいらっしゃいますね、  
隣りは 前田順子さんでしょうか？



森

右端は有馬寛敏君その隣はマコさん



大石

マコさんチャーミング幾つ？



森

多分成人式のあと訪問したのでわないでしょうか



永野

森さん貴方はよか写真を持っていますね？

ビックリ!!子供のころ私もこんな  
元気があったんだねー  
ピッキリポン



安倍

ゴム段飛びの、写真、素晴らしいですね。

飛びては、永野さんでしょうか？



永野

山下岩助先生校長先生でしたの？

私は小学校のとき担任でした。





森

山下先生は校長ではなかったです。  
大龍小4年生担任は石橋先生



木庭

森さん、懐かしい写真よく持っておられましたね！



永野

私は福岡県小倉市に転校しました。  
5年生で大龍に帰ってきました西田先生のクラスでしたー。  
それから長田、玉龍でしたー♪  
大龍で3年生の時西山さんとおなじクラスでした。

中村さんと西山さんの右手のとりっこをしました。

私が右手を繋いだ。

嬉しいのではなく、ゲームでした。

山下先生が男性と手を繋いで、運動場を一周してこいと言われたので  
二人が西山さんだったのでジャンケンをしました



大石

和枝さん！

慌てないで、ゆっくり送信しましょう。ゆっくり読み返してから飛行機✈️タップのこと。



森

暑気払いソーメン流し会を鹿児島在住8期の仲間で開催しました。







木庭  
暑気払い冷ソーメンよろしいですね！  
まだまだ暑さ厳しいです。  
皆さん、お身体ご自愛下さい！



浜崎  
昨日は、腰痛で目覚め、病院は、お盆休みで困り果てていたら、田中ムッチャンのご主人に心よく治療していただき、地獄の痛みが癒え、無事、森リゾートの集いに出席出来ました。出席者は、顔馴染みの友達なのに、いつ会っても新鮮で楽しい。森家の居心地の良さに甘えて、長居をしてしまいました。持つべきは友楽しい思い出になる一日でした。奥様によりしくお伝えください。有難うございました。



西山  
おはようございます。いつも通り近隣を1周してきました。  
暑くもなく、かなり秋の訪れを感じさせる朝です。風も涼やかです。  
恒例になった感がある森迎賓館でのソーメン流し、堪能されたことと思います。  
浜崎さん、お元気な様子で何よりですね。  
ゼンちゃんも隈元さんもお元気な様子、森さん大石さんは相変わらずお元気で何よりです。  
森さんの奥さんもお元気になられたのでしょうかそちらでそれだけの人数が集まられた事は私は奇跡的なことだと思っています。その奇跡をできるだけ長く続けられるといいですね。  
再会できることを楽しみにしております。充分満足していただけるように準備を進めております。



永野



大石  
いまわれわれが戦国島津という時、四兄弟(義久・義弘・忠久・家久)が頭に浮かびます。中央では信長・秀吉・家康(関ヶ原)の頃ですね。  
今日の『かごしま見聞記』はその島津四兄弟のベースになる父、祖父の活動した薩摩半島をベースに当時の様子がよくわかる記事です。

江戸時代から幕末へ日本史の中心で活躍した斉彬・久光(島津)へと繋がるルーツでもあります。鹿児島にルーツを持つ八期のみなさんも、スマホを駆使して、Google で「島津貴久親子」と書き込んで自分なりの「島津探求」してみませんか(?)(?)(?)





隈元

私が島津氏の歴史に興味を持ち初めてその事をブログに書き始めたのは、大石くんがここに紹介している島津日新斎を始祖とする貴久の子供達の下四兄弟が面白かったからです。この辺りから入ると面白いですよ。

加世田城（別府城）跡の入口。現在は児童公園になっている

南薩路 ② 南さつま市

## 加世田城の攻防と逸話

かごしま  
街道見聞記  
【122】

戦国時代の天文年間（1532～56年）前年、島津日新斎、貴久父子の相州家と島津美久の薩州家の本家家督をめぐる覇権争いは、特に薩摩半島で激しかった。

戦況の転換点となったのは、薩州家方の加世田城（別名・別府城）の合戦である。

その経緯は、日新斎が美久に

世田武田で、万々瀬川下流の南岸にある要害。相州家としては、この地を攻め取れば、本拠地の伊作や田布施の南方が安全となり、後顧の憂いがなくなる。天文7（1538）年12月28日、日新斎父子は加世田城へ攻めかけた。大手口は日新斎と貴久、櫓手口は忠将（日新斎二男）という陣立てだった。

同城の大手口には5つの曲輪があり、用心して守りが厳しかった。そのため、29日深夜に忠将が櫓手口に忍び寄り、息もつかず攻め入ったので本丸を落した。敵將の阿多飛騨守や大山内蔵助が討ち死にを遂げた。

田城攻めではないかと思われる。同城の北東、阿多花瀬村（現・金峰町花瀬）に、日新斎が建立したと伝わる稲荷大明神があった。その由緒には「天文7年戌十二月廿九日（中略）大手口の通路に狐火、影しく相見え」とあり、狐火が相州家方に「擁護の神力」となったとする。（旧記雑録 前編「二三四」）

ところが、同時代の「寛輪伊賀入道覚書」には日新斎父子3人が出陣の盃を酌み交わそうとしたとき、面前に蜘蛛の糸が垂れ下がり、前記の「星希の吉瑞なり」と書い、勇んで打ち立ったという。

後世、吉瑞の象徴が蜘蛛の糸から狐火に読み換えられたものだろうか。（歴史作家 桐野月曜付に掲載）



大石

素晴らしい記事と大石先生の紹介文♥有難うございます。

今、大河ドラマに島津4兄弟！そして関ヶ原突破を始良、市来串木野～阿久根出水を♥と運動！やってます！

凄く！大事な記事♥

新聞買います。県下で一番古い稲荷神社 𠩺は市来湯之元！

桐野さんは元祖島津忠久と母、丹後局の墓、1185の歴史を知らない？



大石

さっそく別 LINE が来ました。K

ちょうど読んでいた時に、大石さんからの LINE！

島津家を勉強しようと思っていたところにタイムリーでした(顔文字)

高校時代、日本史も世界史も大の苦手科目💦😄

もう少し興味を引く授業をしてくれたら…と、先生のせいにしてもしようがないので☺️➡️

これから学びます😊



ゼンチャン

宮崎放送の終戦記念番組にえびのの従兄弟の秋丸信夫さんが出ていました。

秋丸機関についての話です

秋丸次朗は私の母の兄になります。

森君から送って来ましたので8期の皆さんにも観て貰いたいと思って転送しました。

ゼンチャン

<https://news.yahoo.co.jp/articles/0e6d5549ecb5180a194902e8c7032ba4061c7691>

太平洋戦争の開戦前「戦争に勝ち目はない」と分析した陸軍の研究班『秋丸機関』



後世に伝えるメッセージ



宮崎ニュース UMK

8/15(金) 19:39 配信

テレビ宮崎では、シリーズで、「戦後 80 年 ～過去を知る 未来に伝える～」をお伝えしています。8 月 15 日は、森山記者とお伝えします。



太平洋戦争の開戦前、「戦争に勝ち目はない」と分析した、秋丸機関という陸軍の研究班があったんですね。（森山記者）

中心人物だったのは、えびの市出身の男性でした。この男性の息子から見た父の姿、戦後発見された貴重な資料、そして研究者の分析から、私たちが次の世代にどう伝えていけばいいのか。終戦から 80 年が経った 8 月 15 日、考えます。

（秋丸 信夫さん）

「私が生まれたところは満州。親父は出征しとった。南方に」秋丸 信夫さん、87 歳。

その間、親父はずっといないんだから。（Q. 記憶は？）ないないない、全然ない」信

夫さんは、終戦の半年前 6 歳で、父親の出身地・えびの市に疎開してきました。

（秋丸 信夫さん）「うわあ暑いね。中にいると全然わかんない、この暑さがね」

（秋丸 信夫さん）「これが全部」（秋丸信夫さん）「この写真はね、昔からあったの、家に。なんでこんな写真があるんだろうかと。それが後になってわかるのね。これが結局ね、秋丸機関」秋丸機関。開戦間近の 1940 年 1 月、陸軍に、日本をはじめ、アメリカ、イギリス、ドイツなど主要国の経済力を調査・研究する機関がつけられました。「陸軍省戦争経済研究班」、通称「秋丸機関」です。（森山 裕香子記者）

「東京大学に來ています。こちらには、太平洋戦争開戦前、秋丸機関がまとめた調査報告書が保管されています」東京大学経済学部資料室に調査報告書が残されています。取り出された資料は 2 つ。「英米合作経済抗戦力調査」の「其一」と「其二」。「其二」には、「極

---

秘」「陸軍省戦争経済研究班」の文字。色褪せることなくしっかりとそう書かれています。

秋丸機関が、およそ 1 年半かけてイギリスとアメリカの経済力を調査し、戦争の見通しをまとめた報告書です。(秋丸 信夫さん)「これが次郎さんね、この班が英米班」真ん中に映っているのが信夫さんの父、秋丸 次郎です。陸軍省戦争経済研究班の班長だったことから、秋丸機関と呼ばれるようになりました。

(秋丸 信夫さん)「うちの親父が、そんな大変なことをするはずはないと思ってたから。こえたん(農具)を担いでるおじさんがさ、百姓のおじさんがさ、戦争をするかしないかという調査をすると思う？」

飯野村、いまのえびの市に生まれた次郎は、関東軍の経済参謀として満州へ。その後、秋丸機関創設のため日本に呼び戻されました。

「其一」には、イギリスとアメリカの経済力の大きさが、「其二」には、弱点が記されています。日本の経済力も分析・比較し、アメリカとの戦争に勝ち目はないと導き出していました。

(秋丸 信夫さん)「色んな人からさ、(報告書が)受け入れられていたら、いまの日本なんて戦争に負けないで、もっと平和になってるんじゃないかって言われる。

そうじゃなくて、歴史に「もし」はないわけですよ」秋丸機関について研究している、慶應義塾大学 経済学部 牧野邦昭教授です。(慶應義塾大学経済学部牧野邦昭教授)「ある意味では、(当時)みんながある程度の正確な情報がわかっていたのにもかかわらず、戦争へと向かっていってしまった、ということを知るうえでの重要な資料だと思う」秋丸機関について、次郎は長く語ろうとしませんでした。終戦から 34 年がたった 81 歳の時に、その時の心情を明かしています。

「すでに開戦不可避と考えている軍部にとっては都合の悪い結論であり、消極的平和論には耳を貸す様子もなく」「大勢は無謀な戦争へと傾斜したが、実情を知るものにとっては薄氷を踏む思いであった」「陸軍は秋丸機関の調査を無視して開戦に踏み切ってしまった」とされてきました。

これに対し、牧野教授は「報告書は正確に戦争の困難さを指摘していたものの、別の形で解釈され開戦の判断材料になってしまった」と分析します。

(慶應義塾大学 経済学部 牧野 邦昭教授)「日本は、近代に入ってから負けたことがなかった。負けたことがなかったからこそ、最悪の結果を想定できなかった。我々は最悪の結果を知ってるからこそ、戦争をしないということを戦後ずっと続けてきた。正しい情報を得るだけではなくて、それをどう使うかという問題が、一番重要なのではないだろうか」次郎は戦後、公職追放を経て、飯野町長を 2 期、えびの市の社会福祉協議会の会長を 13 年務めました。



(秋丸 信夫さん)「戦争の遂行を止めることができなかったから、別のところで、国なり何なりに貢献しようとしたんじゃないかと」次郎の三男である信夫さんは新聞記者となり、定年退職後、ブログで秋丸機関について発信してきました。

(秋丸 信夫さん)「正史じゃないんでしょうね、傍史なんでしょうね。大東亜戦争という戦争の始まりから終わりまでずーっとあってさ、そんなかのほんのわき道なんだ。でも、そういうこともあったということも知ってもらいたい」

(慶應義塾大学 経済学部 牧野 邦昭教授)「真剣な情報発信は、結果としては役に立たなかった。なぜ役に立たなかったのか、希望的観測に飲み込まれてしまったのはなぜなのかということ、反面教師的な形で活用していくというのが、秋丸機関を調べていく現代的意義なのでは」

(森山記者) 私は、父から秋丸機関のことを聞き、興味を持ちました。戦争は遠い話だと感じていましたが、取材をして、情報の捉え方次第で戦争になってしまうと感じました。秋丸 次郎さんは、晩年、「後世の為に何らかの価値あることを」と経験を綴りました。正確な情報があっても、戦争に突入してしまった過去を、繰り返さないようにしなければなりません。



西山

1937(昭和 12)年7月の日中戦争の勃発から、アジア・太平洋戦争の敗戦までに、約 230 万人の日本軍兵士が戦争で死んだ。その多くは戦闘による死ではなく、病気による死(戦病死)であった。

それまでの戦争ではみられなかった大量の海没死(輸送船沈没による死)や、特攻死(特攻攻撃による死)などの異形の死も、この時期、特にアジア・太平洋戦争期の特徴だった。退却の際に、捕虜になって情報を漏らすことを恐れて、手りゅう弾などによる自殺の強要、または友軍に殺害される傷病兵は少なくなかったという。



隈元

2020年7月21日、えびの市の秋丸さん宅を訪ねて、お聞きした「秋丸機関」のブログは下記をクリックしてください。

あの日も暑い日でしたが、えびの市の食堂で食べた冷麺の美味しさは忘れることができません。

<https://plaza.rakuten.co.jp/kumatake123/diary/202112100000/>



木庭

ゼンチャン、宮崎テレビ、秋丸機関、見ました。開戦前にこのような報告書が出され、なぜ生かされずに太平洋戦争に突入されていったのか残念です。他に、私は、京都大学濱崎洋介先生が書かれた大東亜戦争の本質、文学者が見た戦争の舞台裏について、を読んでいます。



上山  
ありがとうございます



西山

## 日本を戦争に引きずり込め！マッカラム・メモランダム

戦争は既に仕組まれていた。

アメリカ海軍情報部極東課長のアーサー・H・マッカラム海軍少佐は明治 21 年(1898 年)長崎に生まれました。少年時代は日本の諸都市で過ごし、日本文化を理解し、18歳のときにアメリカ海軍兵学校に入学し、卒業後、駐日アメリカ大使館付海軍武官を命ぜられて来日します。

アメリカ大使館で当時皇太子であった昭和天皇にジャズのリズムをとるため、膝のたたき方を教えたといいます。



<http://kentakawaii.cocolog->

[nifty.com/blog/photos/uncategorized/2015/07/26/imgp1323.jpg](http://nifty.com/blog/photos/uncategorized/2015/07/26/imgp1323.jpg)

大正 12 年(1923 年)の関東大震災時、マッカラムは米海軍からの救援活動の調整にあたりますが、彼は日本人は尊大で自負心が強く、「異人」の救援活動を快く思わなかったと受け止めます。そしてそれから17年後、日本を戦争に引きずり込むためのマッカラム・メモランダムを作成します。昭和15年(1940 年)10 月のことです。この頃欧州では第二次世界大戦の最中でした。太平洋の海軍基地他、特にシンガポールの使用について英国との協議締結。

- B. 蘭領東インド(インドネシア)内の基地施設の使用及び補給物資の取得に関するオランダとの協定締結。
- C. 支那の蒋介石政権に可能な、あらゆる援助の提供。
- D. 遠距離航行能力を有する重巡洋艦一個船体を東洋、フィリピンまたはシンガポールへ派遣すること。
- E. 潜水船隊二隊の東洋派遣。
- F. 現在、太平洋のハワイ諸島にいる米艦隊主力を維持すること。
- G. 日本の不当な経済的要求、特に石油に対する要求をオランダが拒否するように主張すること。
- H. 英帝国が日本に対して押し付ける同様な通商禁止と協力して

行われる、日本との全面的な通商禁止。

当時、日本は貿易の90%がアメリカ依存で輸入品の2位に石油、4位にくず鉄でした。これらで日本を締め上げオランダ領インドネシアに石油を求めていったらオランダに拒否させようと画策したのです。

そして蒋介石政府を支援し、自らも軍事的な挑発行為を行うというものです。マッカラム・メモランダムはルーズベルト大統領が信頼していたウォルター・S・アンダーソン大佐(後、ハワイ就任)とノックス海軍大佐に承認され、ルーズベルト大統領が目を通しています。リチャードソン合衆国艦隊司令長官はF項に反対し、後に更迭されています。

よくアメリカが日本に対して全面禁輸を行ったのは日本が南部仏印(ベトナム南部)に軍を進駐させたからその報復と言われていましたが、マッカラム・メモランダムに従っていただけです。日本軍の南部仏印進駐以前に石油全面禁輸は決まっていた。

この戦争挑発マッカラム・メモランダムの背景には昭和15年(1940年)9月27日の日独伊三国軍事同盟があります。アメリカ国民は欧州戦線への参戦を嫌っていましたから、日本を挑発し、開戦にもって行き、欧州戦線に参加する意図があったのは明らかでしょう。

昭和16年(1941年)7月9日、ルーズベルトは大統領はチャーチルとの会談で「3ヶ月は日本を赤ん坊のようにあやしてやるよ」と言い、裏口からの参戦を約束しました。



木庭

西山さん、興味深く読みました。



西山

市来龍作さん 月末にこの LINE に書かれたメッセージをまとめて掲載する八期オンライン日記に載せるための顔写真をお送りください。

その他の方々もこの顔写真を使用して欲しいというものがあればお送りください。いつの時代のものかは問いません。



永野

鹿児島すごい雨 ☂

私も流されそう。





大石

終戦記念日の8月15日に載った同年代の作家・評論家の保坂正康氏の投稿を読んでみた。大石

3 総合 2025年(令和7年)8月15日 金曜日 南 日 本



ほさか・まさひろ 39年 札幌市生まれ。ノンフィクション作家。「昭和陸軍の研究(上下)」など著書多数。

### 作家の保坂正康さん

戦後80年は、日本が経験した戦争が「同時代」のものから「歴史」へと変化していく時期だ。同時代というのは戦争を肌で知っている世代の解釈で、そこから一定の期間を経て、普遍的な歴史の解釈へ移行していく。

戦争体験には従軍など戦場体験、空襲など被災や疎開の体験などがある。取材で元兵士に話を聞くと「二度と戦争はすべきでない」と口をそろえた。これを次の世代にきちんと伝えていく必要がある。調査では、直接体験した人は3%だが、親などから聞いて知っている人が20%いて、まだ社会の中で戦争の継承が機能していると言える。

先の戦争が侵略か自衛かという解釈は、史実を検証した上に成り立つ。戦後70年時の調査と比べ、侵略戦争だと答えた人が減り、自衛とした人の割合は増加した。自衛と答える人の割合が今後も増える予兆だろう。「自分たちは何も悪いことをしていない」という感情、国家主義的な発想が前面に出てきていると懸念している。

今回最も興味があったのは、首相によるアジア諸国への加害と反省、謝罪の在り方に関する回答だ。加害と反省に言及した上で、謝罪する必要があるかないかで答えが分かれた。反省と謝罪がセットでないことには矛盾があり、アジア諸国の人々は認めないだろう。

憲法に関する設問で、このまま存続させたい人の中では戦争放棄・平和主義を評価したのが80%に上り、完全に国民に定着していると見ている。

一方、変えるべきだと答えた人では、象徴天皇制・国民主権を評価しない人が10年前は9%だったが、20%になった。1894年に日清戦争が始まり、1945年に太平洋戦争が終わる約50年間、戦争の時代にあった大日本帝国憲法への指向を強め、歴史に向き合っていないのではないかと。戦争放棄・平和主義への疑問も39%に上っており、いささか不安な思いを抱いた。

戦後の日本で特に良かったもので最も多かったのは戦争をしなかったことで、良好な治安、高度経済成長が続いた。これらは日本人のプライドと言える。一方で、将来の見通しでは21世紀の人類史が悪い方向に行く不安を抱いている。つまり、戦争の時代に向かうとの恐れがあるのだろう。

戦後80年を象徴する出来事の上位には高度経済成長などのほか「バブル経済と崩壊」というマイナスの項目も上がった。バブル景気の狂瀾を心の痛みと捉え、歴史を冷静に見ようとしているのだろう。日本人はバランスを崩し、増長すると異様な社会をつくるという「自省」も読み取れた。







森

玉龍同窓会総会の新聞広告です。8期も長老組に入ってきました。広告出稿も中村隆重氏のみになりました!。会費も値上がりしています。



木庭

森さん、情報連絡ありがとうございます。大石さん、保坂さんの記事、読みました。ありがとう。先行、将来への不安を抱いている人 増えているのではないのでしょうか？



森

天気もあがり今夜は錦江湾大花火大会が開催されます。見に行きます。これは昨年の花火大会の写真です。



木庭

森さん、花火すごかったですね！側から見ていると音もはいい、凄い迫力満天、楽しまれたことでしょう。ありがとう。



森

この花火がフィナーレの3尺玉連続打ち上げです



ここあたりはここにはないビデオ映像を見ながらのおしゃべりです





永野  
映像にする技術  
ウデがいいです



大石  
和枝さん♥ハート ブレイク ホテルがいいね。



永野  
大石さん森さん  
映像にして貰い 有難う御座います。  
鹿児島にいながらありがたい ワンダフル。  
現場まで行かれてころびなさんな



大石  
今年は戦後 80 年の節目 ㊦ ということで新聞も特集記事が  
連日続いています。  
見慣れてしまいつい早読みしてしまいます。

そんな中、今日の 19 面の「本土決戦」  
陸軍第 86 師団の記事は熟読してしま  
いました。  
あの沖縄瓶米軍上陸作戦を凌ぐ光景  
が志布志の浜で起こっていたかも知  
れない。  
怖いことですネ ㊦ ㊦  
そして『よかった(いいね)(いいね)』

米軍の  
オリ  
ンピ  
ック  
作戦  
での  
侵攻  
計画





かこしま戦後80年

あの時、ここで

本土決戦

▲ 空気の醸成 特攻

# 「主戦場」は大隅想定

1945(昭和20)年6月、沖縄で勝利した米軍は次の狙いを日本本土に定めた。100万人以上の兵を投入し、25万人を超える死傷者を覚悟した歴史上最大の陸上作戦だ。主戦場は志布志湾、決行日は11月1日。日本軍側も早くからこれを予想して44年4月に陸軍第86師団を編成、司令部を志布志市松山に置いて陣地構築を進めていた。45年8月の日本の無条件降伏で地上戦は回避されたが、大隅半島を中心に県内全域で沖縄戦同様の軍民入り交じった戦いが繰り広げられる寸前だった。

## 志布志の地下陣地



シラスの崖に残るコンクリート造りの壕は、旧日本軍の発電所跡と伝わる  
＝21日、志布志市安楽平床(山野俊郎撮影)

## 総延長16キロ、臨戦態勢

志布志市安楽平床のシラス崖の一角に、コンクリート造りの穴がぽっかり口を開けている。幅4メートル、高さ4・6メートルのコンクリートの壁があり、中ほどに機械を据え付けるコンクリートの基礎のようなものがある。地元では「発電所跡」と呼ばれる。



志布志の地下陣地(1945年当時)

近くの丘の上には「通信壕跡」とされる構造物もある。現在は封鎖されている。下りると、地下に広間がある。コンクリートで覆われ、入り口の先の急な階段が、地下に広がる空間がある。

いずれも太平洋戦争末期の日本軍施設の遺構だ。米軍の上陸に備え、志布志湾沿岸一帯では早くから陣地構築が進められた。志布志は湾沿いの細長い平地に街が広がり、後背部にシラス台地が迫る。この台地の地下に、陸軍第86師団歩兵187連隊約2千人が壕を張り巡らせた。上陸後も同様の地形的な利点が、サツマイモ、教室で食べるのは気まづかった。

86師団は44年4月4日、福岡県久留米で編成された。司令本部は松山村(志布志市松山)の国民学校と、7月には1万3千人余りの兵が、大隅半島に展開した。兵は学校の校舎など、将校は地元の宿舎などに住み、総延長約16キロの志布志湾沿岸に陣地を築いた。

敗れたとはいえ、54万人の米兵を劣勢の11万人で迎え撃ち、苦しい沖縄戦の踏襲を意図したのは間違いない。45年の初夏には、地下陣地は総延長16キロの8・9割方完成していたと伝わる。砲台や機関銃座、弾薬庫に加え、炊事場や井戸を備えた巨大地下要塞だ。各地にあったはずの壕の出入り口は現在、自然に埋まったり安全のためふさがれたりして存在を知る人も少ない。

古く石垣や武家門が残る志布志市松山町新橋の馬場地区は戦時中、民家の多くに軍関係者が寝泊まりしていた。木藤さん(90)は、兵士たちの様子を今も覚えていて。

現在の集落はすっかり高齢化が進み、人影もまばらだが「あの頃、同級生が9人もいて、にぎやかだった」と懐かしむ。祖母と暮らしていた木藤さんの家には、「隊長さん」が寝泊まりしていた。身の回りを世話する従卒もいた。

離れの2階にも、7人の兵士が間借りし、幼い木藤さんに優しく話しかけたという。通った国民学校(現在の小学校)に弁当を届け、校長が持参する昼食は、代用食のサツマイモ、教室で食べるのは気まづかった。

45年3月に小笠原諸島の硫黄島を陥落させた米軍は、4月1日に沖縄本島に上陸した。軍部は4月上旬、第57軍を編成し、「南九州方面の作戦準備を速急完成し、米軍の作戦を撃退すべし」と下命した。57軍は司令部を財部町(現松山町)に置き、先行して陣地構築を始めた。

米軍側の作戦準備は、米軍の本土侵襲に関する日本軍の予測は、ほぼ的中していた。米側の作戦名は「ダウンフォール」。九州上陸を「オリンピック」、関東上陸を「ゴロネット」と下命した。57軍は司令部を財部町(現松山町)に置き、先行して陣地構築を始めた。

45年5月末には「オリンピック」作戦の決行日を11月1日と定めた。ただ、トルーマンには作戦の決行にためらいがあった。米軍は沖縄戦で3万9千人以上、投入兵力の39%を超える死傷者を出した。本土侵襲でも同様の比率で死傷者を出せば、米国内世論の反発は必至だ。政権維持が危ぶまれた。

それでも6月18日の軍高命令で、トルーマンには作戦の決行にためらいがあった。米軍は沖縄戦で3万9千人以上、投入兵力の39%を超える死傷者を出した。本土侵襲でも同様の比率で死傷者を出せば、米国内世論の反発は必至だ。政権維持が危ぶまれた。

ただ、トルーマンには作戦の決行にためらいがあった。米軍は沖縄戦で3万9千人以上、投入兵力の39%を超える死傷者を出した。本土侵襲でも同様の比率で死傷者を出せば、米国内世論の反発は必至だ。政権維持が危ぶまれた。

「日本をすぐにたたきのめさない限り、戦争疲れが始まって米軍が交渉による和平の機案に向かう。そんな『危惧』が米軍中枢に支配していた。軍人の主戦論者が国の進路決定を大きく左右し、兵士や市民の命は単なる数字としてカウントされる。当時の日米両国に通じる姿だった」(山野俊郎)

## 兵士、子どもに緊張見せず



ある日、隊長に顔を連発兵士がおどけながら歩いていく。クスクスと笑う。隊長が「何をしているか」と一喝した。慌てて姿勢を正す兵士の様子がおかしくて大笑いした。今思えば、隊長も一緒に笑って笑わせてくれたのだろう。子どもの前では見せなかったのか、木藤さんの目に映った兵士の姿からは、本土決戦が迫っている緊張や悲壮感は感じられない。時折、米軍機の銃撃はあったが、10歳の少女にとって、戦場は遠い場所の出来事だった。

結局、本土決戦はなく、むしろ怖い思いをしたのは、終戦後だった。木藤さんの近くに、食料などの物資を貯蔵した軍の地下壕があった。兵士たちが去った後、残っていた物資を狙って、住民らが殺された。殺された人たちの姿は「奪い合うように怖かった」と振り返る。

ある日、隊長に顔を連発兵士がおどけながら歩いていく。クスクスと笑う。隊長が「何をしているか」と一喝した。慌てて姿勢を正す兵士の様子がおかしくて大笑いした。今思えば、隊長も一緒に笑って笑わせてくれたのだろう。子どもの前では見せなかったのか、木藤さんの目に映った兵士の姿からは、本土決戦が迫っている緊張や悲壮感は感じられない。時折、米軍機の銃撃はあったが、10歳の少女にとって、戦場は遠い場所の出来事だった。

結局、本土決戦はなく、むしろ怖い思いをしたのは、終戦後だった。木藤さんの近くに、食料などの物資を貯蔵した軍の地下壕があった。兵士たちが去った後、残っていた物資を狙って、住民らが殺された。殺された人たちの姿は「奪い合うように怖かった」と振り返る。

ある日、隊長に顔を連発兵士がおどけながら歩いていく。クスクスと笑う。隊長が「何をしているか」と一喝した。慌てて姿勢を正す兵士の様子がおかしくて大笑いした。今思えば、隊長も一緒に笑って笑わせてくれたのだろう。子どもの前では見せなかったのか、木藤さんの目に映った兵士の姿からは、本土決戦が迫っている緊張や悲壮感は感じられない。時折、米軍機の銃撃はあったが、10歳の少女にとって、戦場は遠い場所の出来事だった。

結局、本土決戦はなく、むしろ怖い思いをしたのは、終戦後だった。木藤さんの近くに、食料などの物資を貯蔵した軍の地下壕があった。兵士たちが去った後、残っていた物資を狙って、住民らが殺された。殺された人たちの姿は「奪い合うように怖かった」と振り返る。

ある日、隊長に顔を連発兵士がおどけながら歩いていく。クスクスと笑う。隊長が「何をしているか」と一喝した。慌てて姿勢を正す兵士の様子がおかしくて大笑いした。今思えば、隊長も一緒に笑って笑わせてくれたのだろう。子どもの前では見せなかったのか、木藤さんの目に映った兵士の姿からは、本土決戦が迫っている緊張や悲壮感は感じられない。時折、米軍機の銃撃はあったが、10歳の少女にとって、戦場は遠い場所の出来事だった。

結局、本土決戦はなく、むしろ怖い思いをしたのは、終戦後だった。木藤さんの近くに、食料などの物資を貯蔵した軍の地下壕があった。兵士たちが去った後、残っていた物資を狙って、住民らが殺された。殺された人たちの姿は「奪い合うように怖かった」と振り返る。

ある日、隊長に顔を連発兵士がおどけながら歩いていく。クスクスと笑う。隊長が「何をしているか」と一喝した。慌てて姿勢を正す兵士の様子がおかしくて大笑いした。今思えば、隊長も一緒に笑って笑わせてくれたのだろう。子どもの前では見せなかったのか、木藤さんの目に映った兵士の姿からは、本土決戦が迫っている緊張や悲壮感は感じられない。時折、米軍機の銃撃はあったが、10歳の少女にとって、戦場は遠い場所の出来事だった。

結局、本土決戦はなく、むしろ怖い思いをしたのは、終戦後だった。木藤さんの近くに、食料などの物資を貯蔵した軍の地下壕があった。兵士たちが去った後、残っていた物資を狙って、住民らが殺された。殺された人たちの姿は「奪い合うように怖かった」と振り返る。

ある日、隊長に顔を連発兵士がおどけながら歩いていく。クスクスと笑う。隊長が「何をしているか」と一喝した。慌てて姿勢を正す兵士の様子がおかしくて大笑いした。今思えば、隊長も一緒に笑って笑わせてくれたのだろう。子どもの前では見せなかったのか、木藤さんの目に映った兵士の姿からは、本土決戦が迫っている緊張や悲壮感は感じられない。時折、米軍機の銃撃はあったが、10歳の少女にとって、戦場は遠い場所の出来事だった。

結局、本土決戦はなく、むしろ怖い思いをしたのは、終戦後だった。木藤さんの近くに、食料などの物資を貯蔵した軍の地下壕があった。兵士たちが去った後、残っていた物資を狙って、住民らが殺された。殺された人たちの姿は「奪い合うように怖かった」と振り返る。

ある日、隊長に顔を連発兵士がおどけながら歩いていく。クスクスと笑う。隊長が「何をしているか」と一喝した。慌てて姿勢を正す兵士の様子がおかしくて大笑いした。今思えば、隊長も一緒に笑って笑わせてくれたのだろう。子どもの前では見せなかったのか、木藤さんの目に映った兵士の姿からは、本土決戦が迫っている緊張や悲壮感は感じられない。時折、米軍機の銃撃はあったが、10歳の少女にとって、戦場は遠い場所の出来事だった。

結局、本土決戦はなく、むしろ怖い思いをしたのは、終戦後だった。木藤さんの近くに、食料などの物資を貯蔵した軍の地下壕があった。兵士たちが去った後、残っていた物資を狙って、住民らが殺された。殺された人たちの姿は「奪い合うように怖かった」と振り返る。





森

新聞では文字が小さくて読み飛ばしていたけど大石君がここに再掲してくれたので拡大してじっくりと読むことが出来ました。有り難うございます。



大石

今朝新聞読みました〜今年は戦後 80 年今まで感じなかった日本国戦後生まれの私ですか〜政権懇話会、新聞、報道、小説等通じて考えさせられる年でもありました。昨今、刻々と戦争に向かっている現状のように心痛める 1 人として、原爆や戦争の悲惨さを後世の若者達に継承して行かなくてはとつくづく思う日々〜平安の中で過ごして来た人達は他人事のように受け取っている友人達も沢山います〜有り難うございます。(上)永野敦士くんの奥様から個人 LINE が来ました。



大石

「オリンピック」のコードネームで志布志が、主戦場になった可能性があったとは初めて知りました。  
終戦が一步遅ければ、南九州も沖縄の二の舞いになっていたかも知れないですね。

もしかしたら垂水に居た両親も、犠牲になっていたかも知れず、私もこの世に存在しなかったかも知れないですね。

この記事は見えていませんでした。良い記事を有り難う御座いました🙏

(上)大迎江(大石友人)から



大石

恐ろしい…

戦争て一旦始めてしまうと、終わらせるのが大変なんでしょうね  
お互い、譲れないのは、人間同士の喧嘩も同じですね  
人間が、本当に地球🌐を破壊してしまいそう💧

(上)海江田順三郎令嬢コメント



大石

そんな事が あったんですね！

それが 実行されてたら 今と 全然違ってましたね  
ほんと 良かったです。

他の場所には 申し訳ないですが(申し訳ない)





大石

戦争をもっと早く止めなかったのか、と、悔しい気持ちになる。  
天皇に諫言できる立場の人は近衛文麿しかいなかったそうだが、  
性格が優柔不断だった…自殺するぐらいならハッキリ言うべきだった！

東條英機は、まだまだ続行すべしと、狂ってる！

現在のUAジェレンスキーも早く終戦をして、戦死者をこれ以上出すべきで無いと思う。



大石

大石コメント

いろいろ意見がありますが…

このコメントはさらに意味深です。この友人は結構難解です。



大石

有難う御座います(ありがとう)

身近な戦況は未だ未だ！！

次々に！初めて！(◎\_◎;)

アメリカへ怒りまで💩👊

私は疎開地体験の6才～それでも！鮮明な時代の記憶。

その頃、叔父叔母の会話！

逃げ惑う靈魂の体験は、2人から聞いています。

西郷銅像の後ろ、藤武さんへ逃げて来た兵隊の靈。

長田町の母実家前の道を逃げる靈魂達の声、、

私も思い出しました、、



ゼンチャン

終戦から80年今年は戦争体験やいろんな意見がライトークされて平和ボケしている我々にとっては改めて戦争の恐ろしいさを実感させる話で後世に語り続けてべきだと思っています。



森

長田町で靈魂の逃げ回るような道は城ヶ谷しかないようですが子供の頃城ヶ谷の上の方に幽霊橋と呼ばれる小さな橋がありましたが何か関係があるのかな



大石

今晚は、新聞の記事を見て志布志がそうだったんだと私も恥ずかしいのですが今日知りました。主戦場が大隅想定だったとは…

私の父は硫黄島に行ってたけど怪我をして帰ってきたので玉砕を免れたそうです。

志布志にしても父にしても…と思います。

新聞の反応、夜まで続きました。



木庭

沖縄の次は、本土決戦が本当だったようですね！

びっくりして読みました。

ありがとう。



ゼンチャン

我が国の憲法は世界で唯一戦争の出来無い国になっています。先の太平洋戦争ではアメリカの戦略に日本はのせられ真珠湾攻撃をして戦争に巻き込まれ日本本土迄徹底的に草も生え無い位焼き尽くされて終戦を迎えました。

アメリカに占領された我が国は徹底的に2度と戦争ができない国に憲法迄アメリカの言いなりに変えられ現在迄憲法も変えずに来て居ますが僕は 80 年間戦争に巻き込まれずに来れた事は良かったと思っています。

もしあの戦争で日本がアメリカに勝っていたらどんな国になっていたか考えただけでも怖い国になっていたのではないかと思うと負けて良かったと思ってしまいます。



木庭

アメリカの占領政策は功罪ありますが、良かったと思いますが、もう少し、日本は将来、どのような社会にするか？自主性のある政治を期待したいです。



大石

<https://youtu.be/u1yEZcaprJA?si=ZGdsdZlIzgEdzaBq>

<https://youtu.be/u1yEZcaprJA>



大石

永留クンから。

これから八期友人はクンづけで書きます。本人にそう呼び慣れているので、あまり会ったことのない八期友人にはさんづけでお呼びします。



浜崎

義母の弟さんは、志願兵の特攻隊で、出水から出撃、帰らぬ人となりました。テレビや映画の戦争シーンがあると、そっと座を立たれ、深いため息をついて、涙ぐむ方でした。

百才で亡くなるまで、18才の弟さんのこと、一日たりとも忘れたことのない人生でした。



永野

森家お墓の様子  
がわかります  
今日は霧島  
よかこつだね



木庭

主戦場は大隅想定、南日本記事、見て、戦後、母に連れら、日豊本線 JR 北俣駅で降りて食料品買い出しに行ったこと、思い出しました。



安倍

今日は私が長年楽しんでいるフォークダンスのお話をします。  
毎週月曜日 夜の 6 時半から 8 時半までの例会にバス 電車を使用して 隣の駅の近くの小学校まで通っています。  
ちなみに 昨夜は 会が始まってから 2714 回目の例会で、50 人ほどの方々と踊ってきました。

少しも上達はいたしません、音楽に乗って 手に手を取って踊ることはとても楽しいです。

コロナ以前は 90 人ぐらい会員がいましたがここに来て、高齢のためやめる人が多く約 60 人でこのうち男性は 14 人ほどです。

私も 最高齢者の仲間ですが、このおかげで元気を保っているのかなと思うと、やめることができません。いつまでもできるとは思いませんが 足腰が言うことを聞いてくれる間は楽しみにしたいと思っています。  
添付の写真は私がまだ入会間もない頃、全部手作りで作ったトラキア

地方の衣装です。3 年ぐらいかかったと思います。

作る楽しみ、着る楽しみ、踊る楽しみです。





ゼンチャン

安倍さんお元気ですね～この歳でフォークダンスをやっているのですね。  
日本舞踊をやっている人は沢山いますがフォークダンスをしているとは若さの秘訣ですね～僕等引きこもりで足腰も弱くなって歩くのも億劫になっています。いろんな事をなさって元気で頑張っている安倍さんが羨ましいです。  
まだ、まだ暑い日が続いていますので熱中症☀️やコロナに気を付けて元気で頑張ってください。



大石

羨ましい！西の寛子さん！東の洋子♥  
南の和枝さんを忘れてた。



西山

安倍さん！フォークダンスをなさっていることも驚きですが、コスチュームが3年もかけた手作りとは凄すぎ。作る楽しみ、着る楽しみ、踊る楽しみに加えて、そして見て貰う楽しみ。



浜崎

大石君、東西南北の北の素敵な方をお忘れでは、吉田さん、そう末富さんは、スクエアダンスの全国大会に、出場された上級クラスの方です。  
大畑さんも。上田平さんも出場されたことがありました。ダンスの上手なヒーチャン東京でお会いするのを指折り数えて、楽しみにしています。



大石

末富さんとは2週間程前にスマホを使ってLINE交信直前まで行ったのですがダメでした。いつかこの八期会LINEの仲間になる日を待ちましょう。



浜崎

吉田さんとヒーチャンはテニスでWをくんで秋田国体で大活躍若き玉竜の、名前を轟かせました。わ、



西山

安倍さんの投稿で、にわかに長文投稿が増えました。  
高まる胸を抑えての事だと思います。

もうしばらくの辛抱、夢は現実になります。



ゼンチャン

吉田さんとヒーちゃんが秋田国体にでた時の練習相手は僕と橋口ケンちゃんでしたが2人が強く歯が立ちませんでした。



西山

今にして知る新事実、驚くことばかりです。でも少しは知っています。

国体派遣の費用が学校から出ず、私費で出場することで校長の許可を得ましたが、代わりに修学旅行への参加は断念したとか。

テニスと言えば、夏休みに磯で泳いで亡くなった色白の上野くんとか言う人がいましたよね。テニス部の人たちは、小石が多いコートローラを引いて整地をしていました。夏休みに私も少しテニスをさせてもらったことがありました。

色黒で歯が白い橋口くんの事はよく覚えています。ブリキ屋さんでした。

後列左が橋口君、前列右から2番目が末富さん、後列右から2番目は善ちゃん？

映像保存家の森さん。噂のヒーチャンは、ここには写っていないのですか？



安倍

末富さんの左隣が、ヒーちゃんですよ。

一番左の女性は、山次さんです。



西山

そうですね、教えていただいてありがとうございます。



ゼンチャン

このテニス部の仲間です。中学の頃からテニスをして、いたのは僕の記憶で日高智君だけだったと思います。1番右側が日高智君です。

このメンバーで現在も現役で毎週テニスをして頑張っているのは橋口ケンちゃんですね～(ガンバレ)



森

名前を覚えていたら他の方々の名前を教えてください



ゼンチャン

男性は日高、南郷、四元、橋口

女性は末富、竹之内、後の2人の名前を思い出しません。



当時の野球部の合宿食事風す



森

監督の奥様も食事風景の写真の後方におられるようです



木庭

当時の部活動、テニス部、野球部、活発な意見交換、当時の門外漢でも懐かし  
く思いました。





大石

小吹悦子！懐かしい名前！

大龍の3？4？年生の時同じクラスだったかも。



西山

当時、キャプテンであった加治屋義人さんに、玉竜の野球部員が少ない理由を、お尋ねしたらレギュラーになれない人は辞めて、勉強に専念したからだと言っていました。

野球部員

昭和	29	30	31	32	33	34
部長	野田敬二	野田敬二	野田敬二	野田敬二	野田敬二	野田敬二
監督	有村増蔵	有村増蔵	有村増蔵	有村増蔵	有村増蔵	有村増蔵
	坂元正憲	徳重 勇	五代友和	有村 駿	宮里三平	吉村利雄
	松崎季則	竹下 脩	市来豊次	佐々木史郎	福永昌生	米盛司郎
	西山俊明	西迫光男	加治屋義人	岸尾和男	四元 等	田ノ上光一
	山下久男	運天政弘	崎田貴文	藤田晃洋	山本公夫	吉見克明
	福崎安義	今釜郁男	山下武男	南園 茂	有馬 宏	浜屋淳一郎
			横水寛治		竹之内英文	藤崎政彦
			福山 満		中山美彦	溜池辰治
					片山智雄	
					小村正夫	

甲子園戦績

昭和	季節	大会	回戦		勝敗	スコア	対戦校
31	春	第28回	2回戦	玉龍	●	0 - 3	○ 岐阜商
33	夏	第40回	1回戦	玉龍	●	3 - 9	○ 法政二
35	春	第32回	1回戦	玉龍	●	2 - 6	○ 大宮
37	春	第34回	1回戦	玉龍	●	2 - 4	○ 高知
39	夏	第46回	1回戦	玉龍	●	0 - 3	○ 花巻商
40	夏	第47回	1回戦	玉龍	●	3 - 5	○ 武相
46	夏	第53回	1回戦		○	12 - 0	● 花巻北
			2回戦	玉龍	○	6 - 4	● 今治西
			準々決勝		●	0 - 1	○ 桐蔭学園

県大会戦績

昭和	季	1 回戦	2 回戦	3 回戦	準々決勝	準決勝	決勝
29	春	2-0 国分	3-2 加治木		2-8 鹿実		
	夏	13-9 出水 0-5 大宮 (宮崎)	7-0 高山	2-0 国分	1-0 加治木	1-0 甲南	0-7 鹿商
	秋		10-3 指宿	8-0 川内	8-1 加治木工	11-2 甲南	0-10 鹿商
30	春		6-0 串良商	7-0 川内	0-0 出水 2-1 出水	13-1 鹿実	8-0 鹿工
	夏	東九州 3-1 大淀 (宮崎)	6-0 伊作	13-0 阿久根農	2-0 鶴丸	5-3 出水 2-12 出水	2-6 鹿商
	秋	0-0 加治木工 7-0 加治木工	11-1 鶴丸		7-0 枕崎	0-1 出水	
31	春						
	夏	0-3 鶴見丘 (大分)	9-0 国分実	7-2 指宿	4-3 鹿児島	3-0 甲南	1-8 鹿実
	秋	8-0 谷山	11-1 藤南		2-9 鹿商		
32	春		2-0 枕崎	16-0 串木野	3-1 川内商工	5-0 鹿工	0-8 鹿商
	夏		7-0 末吉	9-1 指宿	0-3 鶴丸		
	秋	10-3 出水実			2-1 枕崎	1-2 鹿商	
33	春	12-0 鹿屋	3-1 末吉	3-2 甲南	0-6 鹿商		
	夏	7-0 串木野	14-0 宮之城	2-1 加治木	3-2 鹿児島	2-0 鹿実	2-0 照国商
	秋		4-0 末吉	8-1 出水実	5-2 鹿実	0-5 鹿商	





西山

本日午前0時まで8月分として受け付けます。ラストスパート。

永野

西山さん ご無沙汰しています。  
永野は、今は身体を治しています  
8月ぶん!?

森

玉龍同窓会総会に来ています。  
八期は浜崎、木佐貫、森の3人が出席。  
席も一番先頭になりました。



隈元

よっ！大先輩！  
と後輩に言われる歳になりましたね。最後まで楽しんでください。







森

同じテーブルに2年先輩で前田クリニックの院長をされてる前田忠氏がおられて、かねて診てもらっていろいろ注意を受けているのでご馳走を食べにくかったです。

左から3人目の方です



これらの写真の他に、「ライン；玉龍同期会」に動画がありますので、ご参照ください。

浜崎

今晚わ、九時前に帰宅しました。森君、木佐貫君と、三人の出席でした。大石君がいないと、ちょっとさみしいな、そして一級下の迫ちゃんは、ゼンチャンが居ないと盛り上がらないなあと、それぞれの思い、私もそれ以上の思いでした。

二人がいないと、しぼんだ風船みたいです。昨年の美女は、有名なアーティストで、皆の前で絵を描くプレゼンがありました。二人がいないと、声をかける勇気も、ありませんでした。

チキショウ、おやすみ(-\_-)zzz

大石

今日は大石は…

中国cn留学生を引率して鹿屋『大隈くんち』に恒例のサマーキャンプです。

明日はカヌーとBBQ 大会です。





これらの写真の他に、「ライン;玉龍同期会」に動画がありますので、ご参照ください。

#### 編集後記

「八期オンライン日記 100 号」は、大石慶二さんの骨折りと同期のみなさんの協力によって、今日を迎えることができました。

その名称は幾たびか変わりましたが絶えることなく継続されました。

当初、パソコンによるメール交換としてスタートし、スマホでのメールも合わせて採り入れ、時代の移り変わり時を反映して、1 年ほど前から今日のように、スマホ・ラインの投稿・メール交換の場になりました。その足跡をいくつか拾うと、

2017 08 28 八期会歴史愛好会  
2018 05 30 八期会歴史探訪  
2019 06 13 八期歴史会往来第 24 号  
2021 04 01 八期歴史会往来第 48 号  
2023 01 01 八期オンライン通信 67 号  
2024 02 01 八期オンライン日記第 82 号

有意諸氏によって、末永く引き継がれることを祈っております。

願わくば、最後の 2 人になるまで、そして、最後の 1 人に最後の号をまとめて戴きたい。

書いた物はものは残ります。書かなければ、何も残りません。

**History とは、His(Her) Story。**

次頁より「玉龍八期会 卒55周年記念誌」より抜粋転載します。



## 私の鹿児島歴史探索

隈元 達雄（1組）



### 《鹿児島清水城と玉龍山福昌寺》

鹿児島清水城と玉龍山福昌寺は私にとって縁深い場所である。

第一にそれぞれの跡に私の母校・清水中学校と玉龍高校があること。第二にこの二年くらい前から始めた薩摩藩・島津氏の歴史を勉強してみようと思って通れない場所であるということだ。

とはいってもこの二年ほど前までは清水城と福昌寺についての知識はあまり無く特に清水城についての知識は皆無と言ってよかった。しかしこの二つを訪ねたり、調べたりするなかで、それぞれに興味深い史実と史跡が残されていることや、関連があることが分かってきた。

私は七十歳まで約四十七年間の会社生活を全うし、退職してもまだ身体的な余力はあったので、これまで続けていた男声合唱・グラウンドゴルフ、エッセイ書き、読書など好きなことしながら毎日を過ごしていた。そういう生活の中であるきっかけがあり、自宅がある武岡や、周辺の常盤町、西田町、武町、小野町などに多くの史跡があることを知る。持ち前の好奇心が頭をもたげて、自分で「歴史散歩」と称してデジカメ片手に史跡巡りを始めるようになった。そしてそれ等をもとにブログやエッセイを書くようになった。

そのために、図書館で調べたり、ネットで調べたり、ときには歴史関連の講演会に出かけたりしているうちに「歴史探索」に変わっていった。そして知れば知るほど鹿児島島の歴史は薩摩藩・島津氏の歴史抜きには語れないことが、よりはっきりしてきた。

そういう中、二〇二二年二月十五日の南日本新聞に興味ある記事が掲載された。

“かこしま 昔と今を見つめる”というタイトルで書かれたその記事は稲荷町に住む「上町の歴史と文化に学ぶ会」の会長の肥後吉郎という方が清水中学校の裏山にあったとされる鹿児島清水城の“山城”を一人で整備されているというのだ。二〇一一年六月から、地権者の許可を得て山に入り、行く手を阻む竹や木を地道に切り払い、作業を続けた結果、人を寄せ付けなかった山が、九月には道が本丸近くに達し、曲輪（くるわ）や空堀（からぼり）、人工の断崖・切岸（きりぎし）なども見られるようになり、戦国の世の山城をしのばせるようになった、とある。

私はこの記事を見て、清水城は島津家にとってどのような城だったのかと思い、調べてみた。すると大体次のようなことが分かってきた。

暦応四年（一三四一）島津家五代当主貞久が南朝方の肝付兼重らが立てこもる東

福寺城を攻略し、六代氏久（うじひさ）をこの城に住まわせた。そこは鹿児島市の北部、錦江湾に突き出た山（多賀山）に築かれた“山城”だった。

この時期は初代島津忠久が鎌倉幕府の源頼朝から薩摩などの守護職に任ぜられてから百年くらいしか経っておらず、薩摩の豪族も力を持っていたので、自分の身を守るためには“山城”は欠くべからざるものだったのである。

そして島津氏の勢力が伸び、鹿児島が戦場になる危険が少なくなると、東福寺城では島津氏の居城として手狭であることが問題になってきた。そこで七代元久は嘉慶元年（一三八七）東福寺城から少し内陸に新たな城を築いて移り住んだ。この城こそが、その後、天文十九年（一五五〇）、十四代勝久の代まで八代にわたる当主が一六四四年間、島津家の鹿児島城として使用した清水城である。

自分の母校の清水中学校がそういう由緒ある城の跡だったとはまさに青天の霹靂である。現在の校舎や校庭の場所に平城（屋形）部があり、裏山に山城があったという。しかし当時の島津家は家督争いも激しく、それに付け込んだ各地の豪族の主導権争いや下剋上の反乱を誘発するなどお家は安泰ではなかった。その後島津家の本城は内城（現在の大竜小学校）に移り、また鶴丸城へと移るのである。



内城に移転した清水城跡には、一五五六年に大乗院が他所から移転し建立された。大乗院は薩摩藩における真言宗の中心になるお寺であったが、明治元年（一八六八）の廃仏毀釈により領内で最初に破壊され廃寺となった。なお、中学校時代私たちが通学するとき渡った稲荷川に架かる「大乗院橋」は肥後の名工・岩永三三郎が造ったものだったがあの八・六水害により流出し、その残材を集めて二分の一に縮小され若宮公園に移築されている。そして中学校の前には太鼓橋状を保ったコンクリート橋が新たに架けられている。また清水中学校の校庭には、大乗院の五輪塔や石像物が今も残されている。

話が輻湊したが、南日本新聞を読んだ私は、すぐに清水城の山城部を訪ねた。ところが登り口と思われる山道は立ち入り禁止の表示がなされていて、引き返すしかなかった。

それからしばらくして、同じ南日本新聞に“「鹿児島清水城山城部跡」調査整備保存活用事業発足準備の集い”という参加者の募集記事が掲載された。連絡先が先日の記事の肥後吉郎さんである。すぐ連絡を取るとそこで耳寄りな話を聞いた。

中世城郭研究の第一人者である南九州城郭談話会会長で鹿児島国際大学名誉教授の三木靖先生が、当日清水城の案内をしてくださるというのだ。三木先生の話はそれまでの講演会で何回か聞いたことがあり、島津家の研究や日本における城郭研究の第一人者であるということを知っていた。当日、集合場所の稲荷町公民館には、



三十名ほどの人が集まった。メンバーには清水中や玉龍高校卒の人が多く、会長の紀後さんもそうだった。



山道を要所で立ち止まり、三木先生の説明を聞きながら登ること約一時間。この日の最終目的地、送電線鉄塔のある場所に着いた。そこは同じ山城の東福寺城跡がある多賀山の向こうに桜島も眺望できる素晴らしい場所だった。

それがきっかけとなり、七月二十一日「鹿児島清水城整備推進協議会」が設立され同時に「鹿児島清水城ガイド養成講座」が十回にわたり開催されることも決定。八月四日祇園之洲「鹿児島市福祉コミュニティセンター」において発足記念講演会の開催の運びとなった。当日は前記、三木靖先生の「山城のあるまちづくり」と題する記念講演があり、上町地区の人を中心に八十名の人が集まる盛会となった。

その記念講演をガイド養成講座の第一回目とし、十回にわたり講座が開かれて二〇一三年三月十日私も「修了証」をいただくことが出来た。講座は一回二時間十分不及ぶもので、全て三木先生の手弁当に依るものであった。

内容は山城としての清水城、守護島津氏と清水城、清水城の構成、清水城の遺物などで、清水城や守護島津氏のことを入口にして、鹿児島島の他の山城や全国の子津氏歴代の当主のことなど幅広く学ぶもので、私にとっては薩摩学の入門講座になった。

ガイド講座は終わったものの、ガイドをするのは、先の話であり、当面は世に知られていない鹿児島清水城の存在を知ってもらう活動が先である。

次に島津家の菩提寺・玉龍山福昌寺のことである。福昌寺の創建は応永元年（一三九四）鹿児島清水城の初代城主・島津家七代当主元久で、開山は島津一族の石屋真梁禅師（せきおくしんりょう）である。

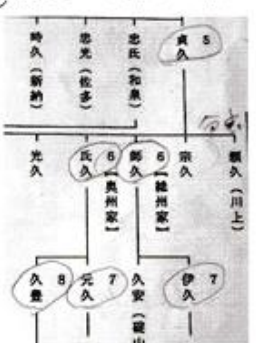
福昌寺の境内は広く、大門、山門、本堂など七堂伽藍のほか大小多数の建物が建てられ、僧侶は千五百を数えた。中国、四国、九州にも末寺を持つ西日本最大の寺院であったという。しかし明治二年（一八六九）に廃仏毀釈で廃寺となり、昭和二十八年（一九五三）に県文化財「史跡 福昌寺跡」に指定された。



この福昌寺墓地には島津家六代から二十八代の当主とその一族の墓がある。その福昌寺を何十年ぶりに訪ねた。ちょうど休みの日だったので、広い墓地の中では示現流の稲古が行われていたが、それ以外はほとんど訪れる人もなく、ゆっくりまわることが出来た。ここにはその後も数回訪れるがいつも静寂に包まれて気の落ち着く場所である。

だがここで不思議なことを発見した。墓所に入っただけの島津家墓地案内図の系

図と島津家正統系図にもある七代当主・伊久（これひさ）の墓標がないのだ。案内図でも系図には書いてあるのに、墓の配置図にはない。明治維新までの島津家七百年の歴史の中で六代当主が氏久と師久、七代当主が元久と伊久と二人いたのも異例だが、これにはわけがある。元久の祖父五代当主・貞久（薩摩・大隅の守護）は息子たちが協力しあひながら南九州を統治していくようにと第三子・師久（総州家初代）には薩摩国守護職を、第四子・氏久（奥州家初代）には大隅国守護職を譲ったためである。



しかしその息子たちの代になり、師久の長子・伊久（総州家二代）（当時薩摩国守護職）とその息子・守久は仲が悪く、守久は父を攻めた。氏久の長男・元久（奥州家二代）は父親から引きついだ大隅守護のため志布志にいたが、帰ってきて伊久と守久親子を和解させた。

そしてこの時、元久は大隅と薩摩の両方の守護をするようになり、それ以降、当代当主はまた一人になった。その後、元久は、手狭な東福寺城から後に清水城を建てて引越すのである。

墓の話に戻そう。当然ながら六代当主の二人と七代当主元久の墓は福昌寺にあるが、六代から二十八代まで福昌寺にあるとされる歴代当主の墓の中で唯一無いのがもう一人の七代当主・伊久の墓である。なぜ歴代当主の一人でありながら福昌寺に墓がないのか、不思議である。



そこで伊久のことを少し調べてみた。伊久という人は私から見れば欲のないお人好しの面もあったようだった。というのは先に書いた伊久の親子が争ったときに、同じ七代当主で大隅国守護だった元久が仲介に入り、事なきを得たのだが、元久に恩義を感じた伊久は家宝を元久に譲り、薩摩国守護も元久に譲っている。しかしその後、恩義のある元久と戦うという局面もあり、凋落していくのだ。こうしてみると自業自得の面もあるが、悲劇の人である。

そして最後には薩摩平佐城（薩摩川内市）で病没したとされる。しかし薩摩川内市にもどこにも墓はないという。なぜこのような扱いをされているのか、不思議に思った私は私なりに調べてみたが、答えはどこにもない。

この謎を解きたい私は、福昌寺墓地を管理される株式会社島津興業の尚古集成館に駄目て元々と思いながらメールで質問をした。すると間を置かず丁寧な回答をい



ただいた。その概略は次のようなものだった。

「七代奥州家伊久は、後に元久と戦っており、応永十四年（一四〇七）に亡くなっておりませんが、墓地の場所不明です。福昌寺を建てた元久と対立したことから、福昌寺の墓地にはないのかもしれませんが、詳しいことはわかっておりません」

なるほど、そうか、元久は対立した伊久の墓は建てなかったのかもしれない。これほど分かりやすい理屈はない。もしそうであれば、元久も普通の人間と同じような感情を持った人だったのかと・・・これはあくまでも私見である。

これで島津家が伊久の墓についていまだに解明できていないことがはっきりしたのだが、それだけに謎は深まった気もする。いずれ解明されるのか。

福昌寺には興味あることが他にもあり、石堀に囲まれた島津家墓地の外にも歴史的に貴重な由緒墓や石像物が多く残されている。

石堀の左側を登っていくと、右側に「歴代住職の墓」があり、開山石屋禅師の墓をはじめ沢山の特徴のある墓標が並ぶ。ここには山側の岩肌に磨崖仏が二カ所彫られている。また住職墓の左側にも大きな三体の磨崖仏が彫られていて壮観である。さらに急な坂を登っていくと「キリシタン墓地」に到着する。

明治新政府は江戸幕府と同様にキリスト教禁止政策を続け、明治二年に長崎県浦上のキリスト教信徒を捕え諸藩に預けるのだが、鹿児島には明治三年三百七十五人が送られ廃寺になっていた福昌寺に収容された。

キリシタンたちは明治六年二月二十四日、明治政府がキリスト教を解禁し、同年十二月に長崎へ帰郷するまでの三年二か月あまりを福昌寺で過ごすのだが、その間の死亡者五十三人が葬られている。

私はその長崎の信徒たちと縁のある浦上天主堂の下二百mくらいの事務所に昭和四十九年の年末から三年間、転勤族として勤務したことがあるので、長崎への思い入れは強く、その悲劇を知り胸が痛む想いがする。



### 《獅子文六の「南の風」と「江田どんの屋敷」》

私が歴史散歩を始めて武岡や常盤の史跡をまわり、写真を撮り、図書館やネットでいろいろ調べ始めたころ、タイミングよく南日本新聞に一つの記事が掲載された。平成二十三年十月十四日のことである。

「特捜指令」「町名誕生百周年の常盤町で史跡めぐりをせよ」という記事で「千眼寺跡（薩英戦争本陣跡）」「常盤谷飯屋跡」「江田殿の屋敷跡」「水上の御飯屋跡（東・西客屋跡）」などが地図と写真と文章で紹介されている。

それまでに「江田どんの屋敷」のことは情報が少なく、唯一「常盤町之史蹟」（昭和十四年八月三十日発行・鹿児島県立図書館蔵のコピー本）のなかで「長屋門」として紹介されていたのを知りだけだった。

そこには、「七八七番地にある江田氏の門は、春日町にある旧川上氏の門と共に武家屋敷の長屋門として、鹿児島に二つより無い貴重な建物である。尚、全氏宅の庭園及び住宅は旧幕時代のまま保存されているので、諸種の研究上参考となるべき点が多い」と記されている。ただこの記述も七十年前のものであり、現在は一部石垣を除きその面影はない。

さっそくその新聞を片手に再度それらの史跡をめぐり始めたが、大まかな地図であり、現地に表示のないものがほとんどのため、場所さえ特定できないものも多い。「江田殿の屋敷跡」もその中の一つで手がかりさえつかめない有様だ。

そんな中、ネットサーフィンをしながらかきつけていたところ、「薩摩の石組み」と言うサイトに行き当たり、「江田どんの屋敷」のことが少し分ってきた。

それによると、江田家は薩摩藩の中級武士の家柄で、安政四年（一八五七年）江田国雅は藩主斉彬のとき、御鉄砲奉行役、御使番役であった。約二百年前に作られた江田邸は今はない。

江田家は神当流馬術の師範家であったと言われ、当時の主座などの配置図は記録として残っている。現在、屋敷跡の確認は難しいが、水上坂沿いの僅かに残る石垣にその名残を見ることが出来る。（石垣に排水口がある）とあり、石垣の写真も写されていた。

喜んで私はすぐさま現地を再度訪れて、今度はそれを確認し、写真も写すことが出来た。そして自分のサイトにそのことを書いた。

するとそれをご覧になった「やまももの部屋」のやまもさんから耳寄りな情報が寄せられた。「古地図にみるかごしまの町」（春苑堂出版一九九六年）に次のようなことが書いてあるというのだ。

「少し水上坂寄りのところに二百年前の武家屋敷『江田邸』があった。江田どんの屋敷と呼んでいたが、江田家は新番という中級武士の家格であった。

薩英戦争、西南の役、太平洋戦争と三回も戦火にあった鹿児島では、二百年前からの家は大変貴重な珍しい建物であった。子孫の方が現に使用してこられたので、文化財指定や観光資源としての公開を嫌い宣伝することもなかった。獅子文六の小説『南の風』で主人公の親戚の家として登場する。（中略）惜しいことに数年前に取りこわされた聞いた。」

これを見た私は、「南の風」をすくなくても読みたいと思い、図書館で借りること



などを思い巡らしながら、何気なく我が家の本棚を見ると朝日新聞社発行の「獅子文六全集」が目についた。

自分で買った覚えはないし、読んだ覚えもない。後で家人に聞くと四十年くらい前に小倉の叔父宅が引越すときに、廃棄しようとしていたので、もらってきたとのこと。本好きの私が何故目にも留めなかったのか今でも不思議である。

本棚には第一巻から第三巻までの三冊がある。これも後で調べたところでは十六巻発行されている。私は祈るような気持ちで第一巻から目次を見た。すると第三巻の最後に「南の風」があるではないか。なんという幸運。

よく見るとこの小説は、昭和十六年五月二十二日から十一月二十三日まで朝日新聞に連載されたのである。私が生まれたのが、昭和十五年だから、私がよちよち歩きをしていたであろう今から七十一年前の小説である。なんとも不思議な縁を感じた。早速読み始めた私は、すぐにでも「江田どんの屋敷」の描写のあるところにいきたかったが、ぐっと我慢して初めから読み進んだ。

主人公は宗像六郎太という無為無能で、東京では「動かない置時計」と呼ばれているくらいの春風駑蕩とした非神経質な男である。

母親は鬼頭院家という薩摩の名門の出身である。亡父は男爵だったが、郷里は鹿児島で、先祖は下級武士で祖父は足軽だったという設定である。

物語は西郷隆盛の渡南説などもあり、奇想天外に展開するのだが、ここでは主要なことではないので割愛する。

そんな六郎太に母春乃が、薩摩武士の精神を教え込もうと妹康子も連れて三人で鹿児島を訪ねるところから、「江田どんの屋敷」のことは始まる。

「車は舗装のできた広い路を走りました。白亜の堂々たる建築が二つ三つ見えた。県庁とか市役所とかいう話だった。鹿児島も相当な近代都市だと思わせた。そのうちに往来が狭くなり、家並みが低くなってきた。建築にこれという特徴がなく、潤いの欠けた殺風景な印象を与えた。

車は長い橋を渡った。甲突川という河だそう。やがて町外れの風景になって山が両側に迫ってきた。ついに車の駐まったところは、一軒家の古色蒼然たる武家門の前だった。」

当時の鹿児島市には、私たちが本駅と呼んでいた鹿児島駅と西駅と呼んでいた西鹿児島駅（現在の鹿児島中央駅）の二つがあったが、小説の描写からすると三人の親子は、鹿児島駅に降り立ったことになる。その後、車から見えた景色や着いた場所などから、その親戚の家というのが常盤町の「江田どんの屋敷」をモデルにしていたに間違いないと思われる。

その親戚と言うのは、母親から駅頭で「六郎太と康子でございます・・・。中郷の叔母さんですよ」と紹介されたことから、中郷家という母方の親戚だろうと思われるが、それ以上のことは書いてない。

「そこがお鹿さんの家だった。

『さ、どうかお入りやったもんせ』と、お鹿さんは、ボンヤリ佇立っている六郎太を促した。

彼はバつだん遠慮をしたのではなかった。古いというよりも今や、崩壊に瀕している門の柱や扉や苔蒸した瓦を眺めていたのである。（中略）原形そのものを見たのは、これが初めてだった。

門を入ると、砲臺のような石垣が邸内を覗かせまいとするように聳えていた。それに沿って曲がると、初めて傾斜の上に玄関が見えたが、家屋に達するには三本の道があった。

一つの石段は、真っ直ぐに玄関に達していた。もう一つの石段は、それに平行して些か低く、内玄関のようなところへ迂回していた。最後の道は、石も敷いてなく、植え込みと隔てて勝手口へ行くらしかった。」

六郎太は、ともかく自分はお客さまだと思って、躊躇なく、第一の道を登った。そのあと母親と妹は、内玄関に続く第二の道を登ることになる。最初の男道、次が女道、三番目が入りの商人や召使の道で、それを間違えたら人間の道を踏み違えたほど笑われたものだったそう。

その他にも、洗濯の壺（たらい）、物干し竿、洗面器も別、女は男より先に入浴しないなど薩摩の掟はいろいろあったが、これらは世に上いわれているような男尊女卑の思想からではないと、この小説には書かれている。

「六郎太一人が靴を脱いだ玄関は、門に比べると意外なほど小さかったが、シンとして薄暗く不思議な威厳があった。もし彼に芝居気があったら、頼もう」という挨拶を免したであろう。

やがてお鹿さんが現れて、彼を奥へ案内した。曲がり角を二度ほど曲がって、眼下に庭の見える八畳の客間へ通ると、中廊下から母親や康子も出てきた。

そこでまた、改めて長い挨拶が始まって、母親は、持参した土産物などを出した。それが済むとお鹿さんは、強いて六郎太を床の間の前へ座らせた。」

「ちょうど、時間は十二時半頃だった。かねて用意がしてあったとみえて、お茶の出た後にすぐ食事になった。

女中が高脚の膳を献げて、六郎太の前に据えた。それはいいが、二度目に現れた時には、お鹿さんと二人でちゃぶ台を運搬してきた。母と娘とお鹿さんと三人分の食事が載せてあった。

六郎太一人が、殿様として時給の膳の前へ座っているのである。

『なんちゅてん、百七十年にもなりもすで・・・』

とお鹿さんは、しきりに屋敷が古く荒れ果ててることを弁解した。」

これらは、極端なようであるが、男尊ということはあっても女卑ではなく、人間の種類を分けるのに男と女ではなく、殿様と家来との二つがあるということが基に



なっていたとのこと。今考えると違和感を覚えるが、これが当時の考え方だったのだ。

「島津公が江戸へ参勤交代の途次、この座敷で休息したこともあった。

(中略)間数は全部で十一間で、勿論平屋であるが、地位(じぐらい)が高い上に、さらに石留の盛土をして土台ができていた。その上に廊下よりも座敷が一段高くなっているの、そっかしい者は、年中ケツますくだろうが、すべてそうした設計の目的は、高きにいる武士の心を養わんがためである。

床下に悉く、厳重な柵を張ってあるのは、敵の間者が忍び込むのを防ぐ用心である。広い屋敷に押入れが一つもないのは、事ある時に襖を取り払って、槍、長刀を自由に振わんがためである。——というような説明を聞きながら、家の中を順々に歩いて行くうちに、六郎太は一抱えもあるような自然石の手洗鉢を見た。

(中略)やがて彼らは、下駄を履いて門へ案内された。門といっても、長屋つきの武家門は、細長い家のようなものである。

その部屋は、御一新以来使わないので、それこそ狐狸が棲みそうだった。

『こころ』物見部屋にあすと、『武者窓に簾が掛けてあって、窓際に床几が置いてあった。それに腰かけて、家の主人は、外を通る農夫や商人の片言隻句を聞いて、下情上通や弾圧の緒(いとぐち)を捉えたのだそう。』

仲間部屋(ちゅうけんべや)は、いかにも寒そうな三畳だった。その隣が駕籠部屋で鼻を掴まれそうに暗かったが、よく見ると、一台の塗籠籠が寂然と置いてあった。封建時代の埃が、一寸ほども積って……家そのものが博物館のようで……」

「南の風」における「江田どんの屋敷」の描写の部分は他にもあるが、大体これまでに書いてきたことに尽きる。

私の読んだ「獅子文六全集 付録月報No.四」(昭和四十三年八月)によると、当時(昭和十六年)、朝日新聞の学芸部次長をなさっていた先祖が、鹿児島出身の後醍醐良正氏が「南の風」と文六さん」という文章のなかでこの小説を書いてもらうために担当者として交渉したことや、鹿児島弁にもいくらかかわったように書いておられる。



そのほか、本巻には獅子文六が昭和十六年二月に鹿児島に取材旅行に来て、南州神社の西郷さんの墓地の前で写った写真もある。

このあたりまで書いたところで、新聞記事の基になった常盤町の百周年記念の一環として発行された「常盤町名 誕生百周年 記念誌」を見るチャンスに恵まれた。

記「常盤町之史蹟」の編纂者、弟子丸方吉氏(常盤出身)資料より、という形で歴史と解説がある。

この記述も初めて知ることも多く素晴らしいのだが、何よりも驚いたのは、立派な庭園に立つ紋付袴の主人と思わしき人を中心に全て和装の八人の男女が写った写真である。

主人の頭にチョンマゲは見えないので、そういう意味では比較的新しいものかもしれないが、よくこのような写真が残っていたものだ。

そしてもう一つあった。それは「江田邸の母屋」の見取り図である。「南の風」の描写では、頭の中でも見取り図を描くことは出来なかったのだが、十一部屋、建坪八十四・三五坪の全貌が表れたのだ。

江田邸の主屋  
建坪 84.35



#### 《島津家と江田家のつながり》

前記「獅子文六の『南の風』と『江田どんの屋敷』」のついでに、島津家とその江田家のつながりについて書いてみたい。

言うまでもなく島津家は鎌倉時代以降、島津忠久を始祖とし、代々薩摩他の守護となり、十八代当主・島津家久からは薩摩藩主として七百年近く鹿児島を支配してきた。

一方江田家は薩摩の武士だが、身分は新番とよばれる中級武士だった。当然のことながら主従関係にあったのだが、そのつながりを調べてみようと思ったのは次のようなことがきっかけだった。

いつも月曜日の南日本新聞に楽しみにしている連載記事がある。歴史作家・桐野作人の「さつま人国誌」で、二〇二二年三月十二日の記事は「島津綱貴継室・鶴姫」とある。

読み進むと驚くべきことが書いてある。鶴姫とは誰だろう。なんとあの「松の廊下」で有名な吉良上野介義央(きらくのすけよしひさ)の娘が鶴姫と言い、島津家第二十代当主・薩摩藩三代藩主の島津綱貴(一六五〇〜一七〇五)の継室(後妻)だったというのだ。



吉良家も名門ではあったが、大藩の島津家とは家格が違いすぎたため、鶴姫の弟で養子として米沢藩主になっていた上杉綱憲の養女という形で縁組したとのことだ。ときに綱貴二十六歳、鶴姫十六歳だったという。

しかし、五年後の延宝八年（一六八〇）、子供が出来なかったからなのか離縁されてしまう。そのことが後に吉良家を巻き込んだ松の廊下刃傷事件や赤穂浪士の吉良邸討ち入りに島津家が関わらずにすむという結果になった。婚姻が続いていれば、島津家もその渦に巻き込まれていたかも知れないというのだ。それを読んで私も天の微妙な配剤を感じることもあった。

それより前、私が常盤散歩をするなかで、常盤谷御飯屋のことを調べたとき、この御飯屋が、島津綱貴の別邸であったことを知る。

自分の住む近いところに綱貴公の存在があったことを知り、フリー百科事典・ウィキペディアで綱貴公のことを調べるなかで、ご夫人のことも調べてみた。そしてその中に「側室・お豊の方（家臣・江田国重の娘）」（鶴姫の離縁後は対外的に「継室」と称された）とある。

常盤谷御飯屋と「江田どんの屋敷」は目と鼻の先の近さなのだが、その二つが私の頭の中で結びついた。なんと江田家の娘・お豊が綱貴公の側室の一人になっていたのだ。まさに晴天の霹靂である。

そこで手許に借りていた「常盤町名誕生 百周年記念誌」を詳細に読み返してみた。すると次のように書いてある。

それは、昭和十四年発行の「常盤町之史跡」の編纂者、弟子丸方吉氏の資料よりということ。「常盤の武家屋敷跡（江田どんの屋敷の謂れ）」と歴史の記録」という記事の中にあつた。

「天保五年、江田国雅によって誌された、江田家、家譜によれば江田家の祖、国重は薩州阿多田布施邑の郷士、有馬千石衛門重次の二男であつたが、江田重兵衛の俵米二十包を買い求めて江田氏を姓とし、ついで貞享四年、藩主島津綱貴の命によって鹿児島城下土となった。これは国重の女於豊が貞享三年綱貴に召されたからである」とあり、間違いない豊は「江田どんの屋敷」の江田家の出であることが分かった。

続けて「この女性は元禄七年には綱貴夫人となり五男五女あり、その息は花岡、垂水、宮之城、吉利、佐志の領主となっているほどである」とあつた。

「さつま人国誌」の綱貴公と鶴姫のことがきつかけて、継室の江田国重の娘・於豊のこともはつきりしたので、綱貴公の正室や継室、側室、またその子供たちのことを少し調べてみた。

島津綱貴の正室は、常照院・鷹司松平信平の娘・米姫だったが一六七三年早世。それ以上のことは現在分らない。

継室（後妻）として一六七六年に上記、吉良上野介の娘・鶴姫が入るが一六八〇年には離縁されている。そのあと、一六八六年に召された信証院・江田国重の娘・於豊が一六九四年には夫人になる。それより前から側室として蘭室院・二階堂宣行の娘・お重もいた。

米姫と鶴姫には子供はなかったが、お重の方と於豊の方の子供はどうだったのか。資料によつては、あと一人側室がいたという説もあるが、その詳細は現在分らない。

お重の方（二階堂宣行娘）との間には、四男一女があり、長男「吉貴（忠竹）」（一六七五～一七七七）は四代藩主になっている。

一方於豊の方（江田国重娘）には、五男五女があり、三男忠英は花岡島津家養子となり、当主となった。四男忠道は島津久憲養子となり、垂水島津家八代当主・島津忠直となった。五男久方は島津久洪養子となり、宮之城島津家七代当主・島津久方となった。六男清純（一六九六～一七二四）は桐寝清雄の養子となり、吉利領主になっている。尚、桐寝家は後に小松家と改姓した。

そしてこの小松家は後に肝属家から養子となり、幕末島津家老として活躍した小松帯刀の家系である。七男・久東は島津久当養子となり、佐志島津家当主となった。また長女・龜姫（一六九〇～一七〇五）は関白近衛家久室、次女・米姫（一六九八～一七七七）は松山藩主久松松平定英室となり、後に離別され剃髪して仏門に入り、信解院と号した。

奈百姫（一七〇一～一七一九）は島津久智室、五女・剛姫（一七〇三～一七二二）は桂久智室となっている。もう一人の女子は夭折したのか、詳細不明である。

このように、江田国重の娘・於豊の方の子供は島津家藩主にこそなっていないものの、それぞれ名をなしている。

それからもう一つある。綱貴公のご夫人・常照院殿（米姫）、継室・信証院殿（於豊）とその娘・信解院殿（米姫）の三人が常盤の隣町である武町のいわゆる「島津どんの墓」（寿国寺跡にあつたが、現在は区画整理と新幹線トンネルなどにより跡形もない）に埋葬されていた。

この墓地には全部で四基しかなく、そのうち三基が綱貴公の縁者であり、しかもその中の二基は信証院殿・於豊その人とその娘・米姫・信解院だった。

たまたま常盤谷御飯屋と「江田どんの屋敷」から数百メートルしか離れていないが、それとは関係のないことだろうし、どう解釈すればよいのか。

それを知るためには、島津家の当主以外の墓地の在り方を調べる必要があるようだ。もっとも上記区画整理等の事情により、現在はこれのお三方を含めて四基とも福島寺跡墓地に改葬されているという。



こうして歴史の一つのヒントからいろいろなことを調べていくと、次々と新しい事実が浮かび上がってくる。だが今回も中途半端な究明に終わり、現段階で全てを説明することは、出来なかった。  
これが専門家ではない私の限界かも知れないが、あきらめずに他のテーマにも取り組んでみたい。

私の最近の生きがいになっている「歴史散歩」に始まり「歴史探索」に行き着いたこの二年間の中でその中心になったことを書いてみた。興味の湧いた人はこの二つを訪ねてみませんか。いつでも案内しますよ。

歴史は「歴史上の出来事や人物を現代の目線で読み解く」とか「歴史から過去を学んで未来を知る」とか言われるが、とてもそのような高邁なところには到達しない。だが精一杯歴史を楽しむことは出来る。

人生の終焉を迎えつつある年代に入った今、思うことも多い。だが、逆にいうと束縛から放たれてまだ四年である。「これからが人生だ」という想いで命ある限り懸命に生きてみたい。

同期生諸君「いつまでも青春」でがんばろう。

#### 参考資料

「島津家おもしろ歴史館」尚古集成館  
「あるく みる いこう かんまち本」  
「さつま人図誌」から「島津綱貫経室・鶴姫」桐野作人  
「武郷土誌」武小学校PTA郷土誌刊行委員会、昭和四十九年  
「常盤町名誕生百周年記念誌」常盤町内会 平成二十三年  
「江戸大名家系譜」ネット情報  
「島津綱貫」フリー百科事典・ウィキペディア  
「上町維新まちづくりプロジェクト・かこしま探検の会」  
鹿児島清水城ガイド養成講座」テキスト 三木靖 他

#### 「いつまでも「自分の歴史探索」は」

「八期通信」の集大成を、創ろうかと大石くんから話があったのはちょうど一年くらい前だった。私にも何か書いてみないかと言う。  
それまでに「八期通信」にエッセイもときを二回投稿し、大石くんのホームページにも手紙の文章を二、三篇取り上げてもらっていたこともあり、何か書いてみようと思った。

実は数年前から五年間くらい、先輩の主筆する短歌を主とする文芸誌に自分の未熟さも顧みず「エッセイもとき」を投稿していて、文章を書くことに興味を感じるようになった。テーマは書く時になって思い付いたもので、「戦前戦後の子供時代のこと」「就職してから住んだ北九州・長崎・徳山時代のこと」「読んだ本のこと」「男声合唱を中心とする歌のこと」「旅の思い出」「仕事のこと」「子供・孫のこと」「市民農園を借りて楽しんだ野菜作りのこと」「グラウンドゴルフや散歩のこと」など種々雑多である。時代もテーマも行った来たり。それでも六、七十編くらいになったときに振り返ってみると、自分史と言えなくもないものになっている。もちろん自分が歩いてきた長い道のりから見ると、とても書き尽くしたとは言えない代物である。しかし、あるときその書くことにも一つの転機が訪れた。その先輩が横須賀に引越されたのだ。（先輩はそれから休むことなく毎月文芸誌は発行中である）ちょうどそのころである、私が歴史散歩を始めたのは。読むものも、書くものも薩摩の歴史一辺倒になり、今回のようなものを自分史のまとめとして、また記憶のために書くようになった。そればかりではない。五年くらい前から始めたブログも最近は歴史ものがほとんどである。

今回投稿の「鹿児島清水城と玉龍山福昌寺」は、最近の自分の興味を書いたものであるが、《獅子文六の「南の風」と「江田どんの屋敷」》、《島津家と江田家のつながり》は以前それぞれ一つの文章として書いたものである。そのために、重なった部分もあり、全体から見るとおかしな文脈になっている部分もあると思うが許しただきたい。

文中にも書いたように「清水城と福昌寺」は自分と大きなつながりがあり、「江田どん」関係の二つは私が生まれ、途中二十数年のブランクがあったものの、現在も住む武、武岡周辺に因む話である。歴史の題材が身近に転がっていることを知った私は、その後いろいろな情報を集め次々に訪ねている。

特に最近では古い石造物に興味を持ち、墓地を訪ねることも多い。その話をコーラスの仲間にする「そいで！ おまんさあがうしとい ないかついちよ」と冷やかされたりする。実際そういう場所は屋敷やお暗く誰もいない場所が多く、写真や写しと自動でフラッシュがさく裂する。しかし、しばらくはやらせようがない。そういうことで、「自分史」までに手が回らないのが実情である。

尚、拙ブログは「わたしのブログ」マタツ1847で検索できる。



## 歌は世につれ!

満留 紀弘 (1組)



何の因果か音楽業界に身を沈めて半世紀余り、相変わらず雑用に追われての毎日です。昭和三十七年、縁あってキングレコード(昭和六年創業)に入社、西も東も分らない青二才が業界の片隅に身を置き以来、制作、宣伝一筋、悔いのない充実した人生の前半期でした。これから後半期に向かって、さて?どんな人生設計を描けばいいのか!音楽(歌)の強力なエネルギーを今改めて思い知らされています。

東日本大震災からやがて三年が過ぎようとしています。その復興はゆ々思うにまかせず、大きな苦勞を強いているようです。そんな人々に励ましの方法はいろいろありますが、音楽(歌)による支援等はその最たるもののひとつではないでしょうか。ニュース等でもご存じの通り、被災地での各種コンサートを目にするとき、歌の持つエネルギーをひしひしと感じることが出来ます。

小生も昨年七月末、宮城県南三陸町に出かけました。あの日、町の防災センターから最後まで避難を呼びかけ、御本人は津波に流されたというあの町です。

住民の皆様は高台の仮設住宅での生活を強いられていますが町は全く手つかずの状態でした。こんな時こそ歌の底力を見せつけ、精神的なサポートが必要だと痛感しました。

音楽にも様々なジャンルがありますが、その一つに歌謡曲(演歌)があります。特に今、昭和歌謡に熱い視線が注がれています。激動の昭和を生き抜き、日本の底力となった多くの人々が歌に励まされ歌とともに泣き、笑い、どれだけ勇気を貰ったことでしょう。



そんな時代の歌づくりのピンポイントに身を置いたことも、それなりにとても幸せでした。

“無から有を作り出す”生みの苦しみも今となってはいい思い出です。これから昭和歌謡を高らかに歌い・愛し・マイペースで……

## 世は歌につれ!

満留 和子 (4組)



年を重ねるごとに文字離れ、人離れが続き、身の整理が読いっぱい、そのような日常で迎えた十年の賀状の中に、同級生のHさんとOさんより八期会便りの原稿依頼がありました。そこで、過ぎし人生の思い出を振り返るきっかけになればと断り切ってペンを持ちました。

レコード会社のサラリーマンだと思っていた我が相棒は、退職するころはすっかり芸能界でプロデュースする人になっていました。

中学、高校時代によく耳にし、口にした三橋美智也さんの「古城」春日八郎さんの「別れの一本杉」続いて「葉白百合子さんの「岸壁の娘」、詩吟の全国会長、踊りの家元さん達のお世話をしていたようで、そのことが少しずつ分かってきたのは私が六十五歳を過ぎた頃からでした。



朝はキチンと八時三十分に出動しても夜はいつ帰宅するか不明、土・日曜はほとんど家にいない。退屈したら家に帰ってくるものと、それはばかりを楽しみにしていた私を見事に裏切って、今もあちらへこちらへと出かけて行きます。

会社勤めの過去が少しずつ分かってきた頃、一番びっくりしたことは三橋さん、春日さんのファンは熱狂的で「みちや会」(会長のもと(会員三百人程)全国組織となっており、年



## 定年後の生きがいを見つけて

木場 祥雄（一組）



人生八十年の時代、定年になってから約二十年どのように過ごすか、もう既に半分を経過し、今までを振り返るとともに残された人生を有意義に過ごすには・・・と考えてみたい。

中国（江蘇省南通市）で定年を迎え、奈良はハローワークで外国人就職紹介を四年間、週三日のパート勤め、その間、仏教のことを勉強してみたいと大学の通信講座、生駒市生涯学習アニメーター（市民活動リーダー）養成講座などを受講したりして、今まで会社と家の往復だけの生活だけで、地域社会のことはほとんど家内まかせ。今後、地域社会へどのような形で貢献できるかを考え、自治会のイベントなどに積極的に参加し、二〇〇一年からは民生・児童委員を引き受け、地域の中で困りごとの相談や支援を行うボランティア、地域住民からの社会福祉に関わる相談に応じ、一人暮らし、児童虐待などの予防活動などに取り組んで、三期九年間活動した。



まず、人様から相談受けるには、自分自身が健康で身体が不自由なく動けることが大切。まだまだ活動できたのであるが、人様に迷惑かけぬうちにこのことで、二〇一〇年に退任した。

他方その間、生きがいのある地域づくりのために地域の仲間とNPO法人を立ち上げ、ボランティアを含む市民相互の交流の場づくりを行い、市民間のネットワークによる情報の共有化を図り、市民活動を支援することによりまちづくりの活性化に寄与するということが、これまでの会社仲間中心の付き合いから離脱し、地域で新しく知り合った仲間と地域活動拠点を構築し、約七年いろいろ活動したが、会員の高齢化により活動に支障をきたすようになって、次世代への後継者育成がうまくできず、二〇一二年にNPO解散した。その後は、

個人ベースで一部事業を継続している。

生駒山上遊園地（大阪と奈良との県境にある六百四十二mの山）の花壇の草取り作業、地産地消で生駒市北部、高山農家の自然米を地域住民への斡旋紹介など二〇〇四年より続けている。

竹林寺（生駒市有里町）境内の清掃。奈良時代の僧行基菩薩の墓と伝えられる墓が境内にあり。行基菩薩は多くの社会福祉事業に関わり、奈良の大仏さんの造立にも携ったと言われている。二〇〇一年より毎月一日、十日、二十日の三回午前中、境内の清掃作業を奉仕している。

竹林寺については「行基・忍性のお墓があるお寺『竹林寺』@生駒」（奈良の寺社ガイド）（<http://snail-life.com/archives/11/09/2621.php>）で詳しく見ることができる。

これから上記事業をあと二～三年継続してやるか？孫の保育所、週二～三回の迎え、ウォーキングなどして、ボケ防止、健康維持に努めたいと思っている。

昨年の秋には八期会南紀ツアー二泊三日の旅行企画を担当し、高野山、熊野古道、熊野那智大社、伊勢神宮など観光し、参加者に楽しんでもらった。また、今年の秋に八期会有志による奈良地方の企画依頼を受け、準備に取り掛かっている。元気で旅行に参加できるよう精進したいと思っている今日この頃である。

### 「ボケずに長生きしなはれや」

古希を迎え、ボケずに長生きすることが願望である。核家族化が進み、わが家も息子らは家の離れも空いているのに住みながら。国の方は在宅介護を進めようとしているが、老々介護になってお互いに身体への負担が大きくなっていくことが懸念される。

日本は長寿国といわれ、男性平均寿命七十九・六歳、女性八十六・四歳となっており「健康寿命」というと、健康で支障なく日常の生活を送ることができ期間、またはその指標総称をいう。男性は七十・四歳、女性は七十三・六歳となっている。男女格差は少なくなっているようである。

自力で身辺のことができ、好きなものを食べた時、時には散歩、遊び、友達と会ったりすることができるといことが、ほんとの長生きであると常々考えている今







日この頃である。

松下幸之助さんの詩言葉に「ポケずに長生きしなはれや」作者不詳として掲載されていた。なかなか実行することはたやすいことではないが、戒めとして心がけたい。

### 《ポケずに長生きしなはれや》

- |   |  |   |   |   |   |  |  |   |  |   |
|---|--|---|---|---|---|--|--|---|--|---|
| ① 年をとったら<br>憎まれ口に<br>人のかげぐち<br>他人のことは<br>聞かれりゃ<br>知っていることも<br>いつでも阿呆で | ② 勝ったらあかん<br>いすれお世話に<br>若いもんには<br>一歩さがって<br>円満にいく<br>いつも感謝<br>どんな時でも | ③ お金の欲を<br>なんぼゼニカネ<br>死んだら<br>あの人は<br>そない人から<br>生きているうちに<br>山ほど徳を | ④ というのは<br>ほんまにゼニを<br>死ぬまでしっかりと持ってなはれ<br>人にはケチと<br>お金があるから<br>みんなベンチャラ<br>内緒やけど | ⑤ 昔のことは<br>自慢はなしは<br>わしらの時代は<br>なんぼ頑張り<br>身体がいうこと<br>あんたはえらい<br>そんな気持ちで | ⑥ わが子に孫に<br>どなたからも<br>ええ年寄りに<br>ほけたらあかん<br>頭の洗濯<br>何か一つの<br>せいぜい長生き | ⑦ 負けなはれ<br>なる身なら<br>花もたせ<br>ゆずるのが<br>コツですわ<br>忘れずに<br>へえおおきに | ⑧ 捨てなはれ<br>あつても<br>持っていけません<br>ええ人やった<br>言われるように<br>バラまいて<br>積みなはれ | ⑨ みな忘れ<br>しなはん<br>もう過ぎた<br>かんでも<br>ききまへん<br>わしゃあかん<br>おりなはれ | ⑩ それは表向き<br>はなさず<br>言われても<br>大事にして<br>いうてくれる<br>ほんまだっせ | ⑪ 世間さま<br>慕われる<br>なりなはれ<br>そのために<br>生きがいに<br>趣味もって<br>しなはれや |
|---|--|---|---|---|---|--|--|---|--|---|

(作者 不詳)

## 八期通信アーカイブス

2009年 第15号  
岩元 嵩明(3組)



「タカサゴ」というと台湾の高砂族も連想しますが、その通りで、台湾の山地に広く野生するユリで、学名は「*Lilium formosanum* Wallace」。大正時代に観賞用として導入されたものが、強い繁殖力で各地に野生化した帰化植物だという。通常のユリは他家受粉をし、花が咲くまで数年かかるが、この花は自家受粉をし、花が終わると一輪につき一本、長さ十センチほどの細長いサヤが出来る。サヤの中は、六列に別れていて、一列につき百個以上の種子がぎっしりと詰まっている。晩秋になると、サヤがはじけて種子が放出され、風に乗って運ばれて行く。その一つ側が我が家の庭に活着したものとされる。

タカサゴユリは、葉が長く先が尖っているのが「細葉ユリ」とも云われる。テッポウユリとは近縁種で、自然交配した新テッポウユリも出来ている。タカサゴユリは、花の外側に海老茶色のストライプが入るが、白い種類もあるとのこと。我が家の花は、ストライプは入っておらず、テッポウユリに似ている。西日本を中心に広く野生化していたようであるが、種子が風に乗って東上してきたものと思われ、近年横浜の我が家の近隣の道端や空地、庭等に咲いているタカサゴユリを見かけることが多くなった。繁殖力が強く、軽いのので風に飛ばされない窪みや、隙間に入り込んで活着している。秋に出来る種子を前庭、裏庭、通路等に蒔いておいたところ、新芽がいっぱい出て来て、毎年花を咲かせている。高さ三十センチで咲くものや、1.5メートルくらい高くなるものなど様々であるが、清楚な美しさにひかれ、百合屋敷と自称して楽しんでいる。

## 八期通信アーカイブス

2008年 第14号  
渡辺 義照(5組)



昭和30年4月、玉龍高校に入学し、先輩の勧めでバスケット部に所属。以降、土、日曜もなく、明けてん、暮れてん、バスケの練習漬けでした。当時、部員は3年の萩原、松崎、2年の日高、神宮寺、町田、大西の各先輩と1年が松本(マツト)徳永(トクケン)浜田、草野(後の俳優、途中退部)渡辺で、監督は谷崎先生でした。体育館で練習するのは県内では少なく、我々は恵まれた環境で練習に励む事が出来ました。

5月、6月に玉龍高校体育館に於いて県大会が開催され、両大会とも準決勝で志布志高に惜敗し「ハガイカ」思いをしたものでした。それからが玉龍高校黄金時代の到来!

10月末、川内市の川内祭りでバスケの大会が開催され、我が玉龍高も1、2年の新人チームで出場する事になりました。初戦から順調に勝ち進み、決勝戦で強豪川内高と対戦し、接戦の末初優勝。部員一同、大いに盛り上がったものでした。感無量!

この事が原動力となり、後々、県の各大会を制覇することになったのでした。昭和31年4月、有望新人も入部。一段と戦力アップ。5月、6月の県大会に優勝し、九州、全国、両大会に初出場する事になりました。

全国大会は、鳥取県で開催され、群馬県前橋工と対戦。惜しくも敗退しましたが、他県との試合は、弱点を強化する等の後日の練習に生かされました。昭和32年の5月、6月も二年連続で県大会制覇。この年は女子部も同時優勝し、九州、全国大会(東京)アベック出場の快挙を成し得ました。結果は、男女とも一回戦惜敗でした。